

## 古代ヘブライ民族の家族道徳について

### 孝 道 (二)

孝道に関する研究が意外な程に僅少であるのは事實であるが、しかし全くない譯ではない。二三の貴重な研究がある。英國の碩學 Edward Westermarck 氏には *The Subjection of Children* と題して、子女の親に對する従順については世界各地の風俗を引證した研究論文がある。(The *Origin and Development of the Moral Ideas*, vol. I, pp. 597-628)。東京帝國大学文部部教授戸田真三氏はその「親子の結合に關して」と題した論文に於て、親子の親密關係の緊密弛緩の理由を抽象的に考究せられてゐるが、これは有益な社會學的研究である(社會學雜誌第三卷第三號)。松原鶴成博士は狩野教授還暦記念支那學論叢(三六九)に「支那の孝道、殊に法律上より見る支那の孝道」の著作を寄せられ、博士は同論文に於て支那に於ては歴代、孝逆を以て修身平天下の根本義としてゐたる

事實を詳細に叙述し、今日の孝道の廣狭を目して悲憤慷慨の情を洩されてゐる。吾々の如き若輩は老博士の斯くの如き熱情に甚だ恐縮せざるを得ないが、博士が漢人が如何なる事情で孝道を以て根本道徳とするに至つたかを説明されれば、後學の爲め裨益するところ少からずと考へられる。F. Steinmetz氏はドイツの「社會科學雜誌」第一卷頁六〇七—六六三に *Die Verhältnisse zwischen Eltern und Kindern bei den Naturvölkern* の一稿を發表せられてゐる由、これも有益な研究と思はれるが、未だ見るを得なかつたことを遺憾とする。この問題についてはヘブライ方面に於ても寂寞たるものであつて、たゞこれに觸れるものがあれば、それは家長權又は父權の如き項目の下で、子は親に絶對服従するものであり、親は子女に對して生殺與奪の權を振ふことが出来るといふやうなことを何等の不可思議もなく書き並べてゐるに過ぎない。

「父子之親、夫婦之道、天性也」(禮記檀弓)とは古代漢人のイデオロギイであるが、吾々も小供の時に斯様な意味の教訓を授けられたやうに記憶してゐる。今更これについて論ずるのは全く無用のやうに見えないこともないが、しかし考慮しなければならぬところが幾分ある。「父子之親」とあるも、これは親子の相互的和合を意味するものでなく、これは一方的なもので子の服従を意味するものである。彼等漢人は子に絶對的服従を要求するのであるから「父子之親」といふのも其の實質上に於ては子に對する負擔に外ならないのである。親子の關係を孝道と人類の本能と解したのは古代

支那人のみではない。日本に於ては故穗積陳重博士の如き博學を以て世に識れ殊に西洋の新しい學問に通曉せられてゐた學者に於ても孝道は人類に殆んど本能的に潜在するものであり社會の基礎的德義であると解せられたのである。

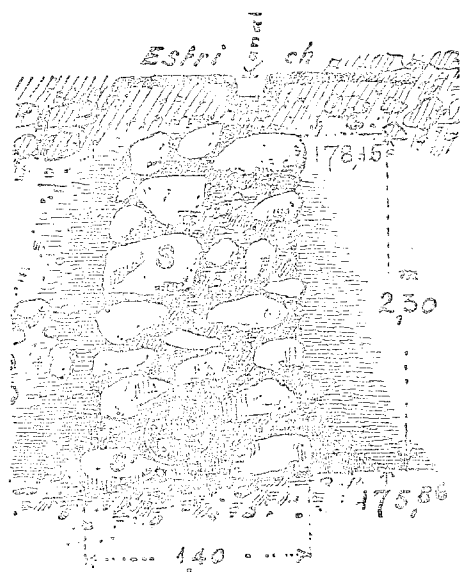
人間に於ては社會事情が複雑であるために親子の關係も極めて込み入つてゐるから、先づ他の動物に就いて觀察するのも一助となるであらう。下等動物は大抵卵を産み放すのみで、それ以上には生殖について骨を折ることがない。澤山な卵を産むが、若くは卵を産み附ける場處等を綿密に選擇するのであるから、産む以外には子の世話をしてしなくとも子孫の繼續に心配がないのである。卵の産み放しから一步進んで或る期間だけ之を保護するものがある「ヒトテ」の一種で普通のヒトテに比して何千分の一にしか當らない少數の卵を産んで之を自分の體に持つてゐるものがある。「子負ひ蟲」は卵を雌の背につけて、その保護をはかる。魚類も多くは産み放しの方であるが、しかし淡水産の「トゲウヲ」の如きは産卵期に入ると雌が腎臓から出る粘液を用つて水草の莖などを寄せ集めて圓い巢を造り雌を呼び來つてその中へ卵を産ませ直にこれに受精して、その後は絶えずその近邊に留つて番をしてゐる。蛙類の中ではドイツ、フランスの南部に産する「産婆蛙」は雌の産んだ卵を雄が自分の足に附けるのであり、南アフリカの北部の熱帯産の「背孔蛙」なるものは雌が粘液に混じて數十個の卵を産み出すと、雄が之を雌の背の上に塗り附けてやり、日數が経ると雌の背中の皮

膚が柔かく厚くなり卵は一粒づつその中の孔に嵌まり包まれ、斯くして保護せられるのみならず「オクマジヤクシ」時代をも越して四本の足を備へた小さな蛙になり、一人前になつた時始めて母體を離れるのである。動物の中には自分の卵を保護するものがあるのみならず、その産んだ子に食物を與へたりして之を養育するものがあることは鳥獸の例によつて明である。鳥類や獸類の高等動物に限らず、蜂の如きものも幼虫に餌を與へるのである。單に卵を保護したり子を養育するのみならず、子孫保存のために親が自分の生命を犠牲にし、又は親の肉體が子に食はれるものさへある。「蜂室」の雄は女王と交尾したまゝ氣絶するのであり、「カマキリ」の雄は交尾したまゝで頭の方から雌に食はれるのである。「介殼蟲」の如きは死んでも尚ほその殘骸を以て卵を保護するのであり、「ハナバチ」、「マルバチ」の如き母體を犠牲にしなければ生殖の不可能なものがある。蠅や蛙類にある寄生蟲の中には母體を食ひ盡すものがある。斯くの如く蟲の類や魚類の多くは親子の情といふものを知らないが産卵その他について萬全を期してゐる爲に種族の保存に支障をきたすやうなことがない。鳥類や、哺乳類の如き高等動物は少數の子を産んで比較的長い間鄭重に之を養育するのである。神經の發達した動物に於ては、親に養はれてゐる期間に限つて子が聊かなりとも親を慕ふ形跡の見えるものがあるが、一旦一人前に成長した後にはその情がなく、親を扶養するが如き動物は一つもない。要するに動物はそれ／＼種族保存の本能を有つてゐて親は子のためには少からぬ苦勞をする

が、子が親を慕ひ親の爲めに世話をするといふやうなものは全然ないのである。<sup>(三)</sup>

人類に於ては産み放しのみでは一日もその生命を維持することが出来ないものであるから、その純朴な感情に於ては子を養育する育児本能があるものと認めねばなるまい。斯くの如く人類も種族保存の天分を有つてゐるのにも拘らず往々これと離反する風習を有するものがある。或る種の民族に於ては生活難その他の原因によつて拾見殺兒の風を以て通俗或は徳義と看做すのみならず、また異兒を殺して之を食ふものさへある。

ヘブライ人の信仰したるエホバ及びその他の神々も他の民族の多くの神々と同じく人情を具有し、住居として特定の神境または神殿を構へ、飲食物として酒、油、穀類、果物、菓子、鳥、羊など及び香料等の供給を受けた。その他、ヘブライ民族には人身供犠の風もあつた。神學者の中にはその事實を否定すべく努力する人もあるが、聖書の記載と最近の考古學的發掘の結果は人身供犠の存在をあまりに鮮明にするので、否定されるべくもない。ゲゼル<sup>(G. E. Zeller)</sup>の遺跡地では甕の中に收められてゐる生れたばかりの嬰兒の遺屍が一ダース程發見された。それらの甕には死屍の外に土が一杯つまつてあり小さい土甕が一ツあつた。またターナクとメギドに於ても甕の中に子供の死屍を入れてあるのが發掘された。<sup>(四)</sup>でもこれと同様ののが出土した。ゲゼルでは建物や城の下から女や小供の骸骨が現はれ、メギドの古城の下部の疊石中からは小供を入れた甕が出土された。(挿圖



たる子女犠牲の形跡、舊約聖書を繙讀すれば最早これを疑ふことが出来ないであらう。

W・R・スミス氏がセム民族の動物犠牲を以て人身犠牲の名残であるとして主張したのは遽に賛成し難いが、舊約聖書中に人身供犠殊に子女供犠に關する記載が豊富にあることは顯著なる事實である。<sup>(5)</sup>或は歴史物語となつて現れ、或は律法の禁斷、領言者の反對となつて現されてゐる。創世記第二十二章によれば神に忠實なるアブラハムがその獨子イザクを焚いて犠牲にせんとしたのである。ニフタは神に向つて、若し彼に戦捷を許せば、凱旋して家に歸つた時彼を迎ひに出る最初の人

参照)。これらの死屍の中には普通の埋葬によるものもあるやうであるが、兒童供犠または人柱(Banquet)の存在を證するものがある。<sup>(6)</sup>これらの遺跡は先住民のカナン人のものとされてゐるが、一體にヘブライ人とその先住民の遺跡には確然たる區別がある筈がないのみならず、ヘブライ人は先住民の文化を最初そのまゝ受け入れたものであるから文化史上兩者を區別することは殆んど不可能である。これら發掘に現れ

を神に献上すると誓願した。果して彼はその時大勝を博して家に歸つたところ、鼓を打ち鳴らし踊り出たものは彼の獨り娘であつた。神との聖約を破る譯にもいかず、遂に涙をのんで自分の愛娘を血祭にしたといふ。モアブの王様メシヤはイスラエルと戦を交へて難戦に陥るや自分の嗣たるべき長子を石壇の上に置き之を焚いて燔祭を行つた結果、戦況が一變してイスラエル聯合軍を撃退することが出来たといふのであり、またニゲヤの王様アハズやナナセの如きもその子を燔祭の血祭に献げたといふのである。列王紀略上第十六章に「其代にベタル人ヒエル、エリコを建てたり。彼其基を置る時に長子アビラムを喪ひ、其門を立る時に季子ゼグブを喪へり」とあるが如き、人柱の風習を奨擧するものであらう。大なる土木工事に際して工事の進行を交易物ならしめる爲め、又は其の建設物に將來堅固と幸ひを齎す爲めに人身供犠を行つたものに外ならない。斯様な人柱の風習は古代シリヤやアラビヤ等にも見られるのである。<sup>(7)</sup>彼等の人身供犠には種々の動機が含まれてゐるやうに記されてゐる。人柱あり、戦争の勝利を期するを目的とするものあり、戦捷の恩を神に報ゆるを目的とするものあり、或は捕虜を一種の戦利品と看做して敵國供犠をするものあり、或は現在の災難を免れる爲めのものもある。ダビデ王の治世中に三年間饑饉に見舞はれたので神の怒を緩和して饑死の危機を免れる爲めにサウルの遺族七名を血祭にしたといふが如きも彼等の實際生活から割り出されたるものである。兎も角、彼等は人身供犠に由つて、緊急非常の際に超越者の恩恵を請ひ、平時には之

に由つて神の好意を維持増進せんとしたものである。即ち迷信的信仰がその主なる動機をなしてゐる。その執行方法にも色々あつた見える。最初刺殺して火焰に投ずるものあり、或は山上の樹木に懸けて絞殺するものあり、或は單に刺殺する例もあつたが、やはり最も弘く行はれた方法は焚殺即ち燔祭であつた。

舊約聖書に現れたる一般の空氣を見るに、人身供犠は邪宗信徒にある惡習であつて、いやしくもエホバ教を奉信するイスラエル人たるものは斯様な弊風を一切避けねばならないといつてゐる。モレク、パール、ケモス等の諸邪神に人身供犠が伴ふたが如く記されてゐる。しかしヘブライ人は宗教生活に於て一時は周圍民族と異るところなく、パール、モレク等の神々は彼等の厚く信仰したるものである。後世エホバ一神教が確立した時にもヘブライ人の中には尚ほこれらの諸神祇を戀々崇拜するものがあつた位である。ヘブライ人が人身供犠祭に子女犠牲の風習を有してゐたことは疑はるべくもない實事に屬するが、エホバ教に人身供犠が伴つてゐたかどうかの問題は可なり複雑な問題であるが、少くともエホバ一神教もその初期に於ては人身供犠を伴ふてゐたであらうと考へられる。實際エホバの御名に於て人命を獻げられた例も二三残つてゐるのである。邪神への供犠の記事に於てもその記者の態度が人身供犠の効能を信じてゐるものとしか考へられない場合が多いのである。初生子犠牲、その他不明の問題が若干あるが、こゝでは必ずしもこれらを究明せねばならぬ必要もない。

生物學の引證によつて推察される如く獨り人類にのみ親を敬む扶養するやうな本能がある譯がない。親に對して輕蔑的な態度を持し、又は殘酷な處政を取る民族も少くない。親がある一定の年齢に達し、或はある狀態に置かれたる場合には親の生命を奪ふことがあるのである。民族によつて、その老人に對する待遇が色々違ふが、食糧缺乏する憂があり、或は遊牧のため方々を轉々として旅をしなくてはならず、或は敵と戰を構へるが如き場合等に於て自活力のない老弱が一族の負擔となるのであるから、老人を捨棄したり自殺させたり或は殺戮する風俗が多く未開民族に見られるのも決して無物ならぬ理由があるのである。衣食に窮し或は迷信に驅られて同類の人を喰食する惡風が古今世界各地にあることは今更異とするに及ばぬ事實であるが、自分の親を殺して食ふ民族もある。スマトラ半島の *Memak* 人の間に於ては老衰したる親を樹に登らせ、その下に子弟その他親屬が集つて「時節は來たり實は熟したり、さらは下れよ」と挽歌を合歌しながら其の樹を振る。斯くして老親が樹から下ると之を殺して食ふのである。その他 *Memak* の土人にも之と類似の風俗があるといふ。親子の愛着といつても、それは子に對する親の情と親に對する子の情とに區別して見るべきものである。一口に親子の情といふのは非常に漠然たるのみならず、その本質から見ても適當であると思ふ。人類に於ても他の動物と同じく子に親を養ふやうな本能がないが、親には子を生育す

る本能的に有るべきといふも、理智が発達し複雑な生活を営むのであるから親に斯様な本能的純情を認めることも實際に於ては困難である。所謂親子の情なるものは血縁による先天的な感情ではなく、共同生活に於る生後の接觸によつて生ずるものである。捨子、殺見の場合、生れてから長い時間の経たぬ内に之を實行するのも未だ親子に愛着心が出来ない内に實行するといふに外ならない。代理生殖の子といひ養子といひ自分と何等血統上の關係のないものも普通の親子らしく生活を共にするに於ては親子らしくなるのである。今日では最早敢て取り上げて問題にする程のことでもないが、孝養の道德を以て本能的なものと關係づけんとするが如きは矛盾の甚しきものである。

古代ヘブライ民族は從來よりその父權的族制に於て典型的な民とされ、ヘブライ史に *patrilocal*, *patrilineal*, *patrilineal* の如き詞は常有のものとして到るところに使用され、しかも斯様な詞の下にまた多くの事象が當然のものとして語られてゐるのである。結婚の如き場合に於ても婚約を取り定るものはその當事者ではなく多くの場合その父兄であつた。自由戀愛といふ如きものは彼等の間では通用されなかつた。親が自分の子女の爲めに適當な配偶者を求めてやるのが通例であり尙ほ子の妻さへ親がこれを物色してやるやうな例があつた。親は子女の貞操を監督すべきといふも、親の諒解さへあれば廢女を誘惑したり暴行しても罪にならない有様であつた。子女の結婚貞操の權は親、否、父の掌中にあつたのである。ヘブライ人は他の民族と異ることなく人身賣買を盛んにや

つて、奴隷が多かつた。従つて人間が一種の貨物と見られ人身掠奪さへ行はれたのである。金錢に窮した時に子女を賣(利用權を伴ふ)に入れることがあり、または債權者が債務者の子女を差し押へることも往々あつた。自分の子供を奴隷に賣り飛ばすことは普通の日常事であつて世評も國法も之をとがめなかつた。斯くの如く子供が親の所有物と見らるべき點がある。その他先に記したるが如き子供殺戮の風習があつて親が子供に對して文字通りの生殺與奪の權を振ふことは從來學者が父權を論ずる場合には忘れずに注目したところである。父の罪の故に、または父の名譽と信用の爲めに子女の貞操、生命が犠牲にされることのあることは舊約聖書を見たものには直に諒解されるであらう。

ヘブライ民族は着しい子慾の民であつて詩篇に「年壯きころほひの子は、ますらをの手にある矢のごとし。矢のみちたる箠をもつ人はさはいはひなり。かれら門にありて仇とものいふとき恥づることあらじ」とあるが如きはよく彼等の心境を現すものである。若い婦に對して「汝千萬の人の母となれ」と言ふのは禮の厚い祝詞になつてゐるのであり、天空に戴く星の如く、濱の眞砂の如く、多數の子孫をもつことは彼等の理想とするところであつた。子福思想の強い彼等の間に於ては石女はの子なき故に自分の當然の地位を獲得することも出来ず輕視されるが如き有様であつた。且つ古代ヘブライ民族は所謂家族制度を堅く守つたのであるから子は親の膝下を離れることがなく一家一族は同

財閥層であつて、親子が異財別居することは極めて稀であつた。斯様な事情の下に於て子たるものが親に服従し美衣美食<sup>(2)</sup>を以て孝養しなくてはならぬといふ。これ親が自分の子に對して横暴であり、子は親の爲めに搾取されるといふことではなからうか。

この問題に關聯して福田德三博士の著書「經濟學原理」の中に興味ある記述が見られる。博士は曰く

資本制以上の勞働掠奪<sup>(原文以上)</sup>自。川大家族は其殆んど一切の勞働をあげて戸主に奉仕し、其報酬として供せられる丈です。マルクスの所謂勞働の掠奪<sup>従に議論</sup>は決して資本制生産社會に於てのみ、資本家のみによつて行はれるのではなく、此の如き幼稚なる生活をして居る大家族中に於ても行はれ居るのです、否資本の掠奪よりも遙に徹底的に掠奪するのです、マルクスの掠奪説の誤謬なることの絶好の一例として白川の大家族は興味深いものであります。今迄觀察された諸君が此事に論及して居られないのは、何故ですか、私は不思議に思ふのであります。即ち、飛騨白川村の大家族制に於ては子弟の出嫁ぎを許さず。女子が自分の母の家を離れて他家へ嫁に行くことが許されず結婚といふのは夫の方が妻の家へ時々出張するやうな形のものであり、一家には多數の家族を有するのが普通であるが、それらの家族は家長の支配下にあり、家長は普通の家族に比較して一段高い地位にあつて一家を統制し一家の資産は家長の有と看做されるのであり、

家族は家長の指圖に従つて勞働し衣食を供せられる。福田博士は斯様なことを以て直に家長なるものが家族の勞働を搾取するものなりとし、しかもその搾取たるや資本主義社會に於る資本家の搾取よりも更に露骨なものであると強調せられてゐるが、博士の論は果して正鵠を得たるものであらうか。この白川村の大家族制なるものは今日初めて始つたものではなく、以前からの存在なのである。白川村は急峻な山岳に圍まれて極めて交通の不便なところであり、日常生活なども昔ながらのものであつて非開化的であり。産業も幼稚な状態にあつて村民は勤勉な勞働によつてさうやかな生活を維持してゐる。外部との交通の不便なところであるから從來家族が出稼ぎなどをしなかつたのも無理ならぬ點がある。外部との接觸のないものが自分の生れた家に居留るのは自然であつて、今日都會の住民が自由勞働に従事するのとはその事情が甚だ違ふ。他家への女子の出嫁が許されないことも、これは一種の結婚制度として別に検討すべき問題であつて、これは直に子女が搾取される論議にならない。家長は帶妻、衣食、勞働その他に於て一般の家族に比較して幾分優待されてゐるが、それも極く少しの程度の問題であつて、家長が自分の家族の生活を顧みないで自分獨り血肉を食ふ譯ではない。家族と同じく喜書と共にし窮するときは饑寒を分つのであつて、家族の生活を忘れた搾取はないのである。吾々は現代的な文明に到達してゐない未開社會に勞取的行爲が全然ないとはいはない。しかし福田博士が白川村を例證として同家族内に於ても極端な搾取が行はれるを主張せ

られたのは明白な誤謬である。福田博士はあまり外形にとらはれて肉實の考察を等閑に附せられた憾がある。博士の主意はマルクスの説に對する反駁にあるやうに思はれるが、吾々は今マルクスの學說について素養がないために福田博士の目標とするマルクスの説に對して適に意見を述べることの出来ない状態にあることを遺憾とする。しかしマルクス説反駁の爲めの福田博士の説そのものが誤謬に陥つてゐることは斷言してよいであらう。

W・R・スミス氏はセム民族に於ては普通に父を意味する *ab* (二三) には父、夫、所有主の義があるとしてゐるが、古代のヘブライ語では「アブ」に夫、所有主の義がない(ジクフリード・シエタード、舊約ヘブライ語字典參照)。舊約聖書に於ては神様が父(アブ)と呼ばれることが多いのであるから「父」といふ語に類する權威が伴ふやうに考へられたのは事實である。一家に父、家長がある如く、エホバ神はイスラエルの父として立つてゐる。しかしそれは神様が民の庇護者であり指導者であるといふ心持から出たるものであつて、所有的觀念から出たものとは言へないのである。スミス氏は同じく *Yahewiy* の研究に於て相當に奇抜な説を發表した。即ち父なるものは必ずして血統的關係から見るべきものでなく所有的關係から定まるものであつて、即ち現在の自分の妻の生んだ子供はそれが血統上何人の子であらうとそれには關係がなく自分の子と看做されるのが原則であると斷定したのである。The son is reckoned to the father on which he is born であり、從つて父な

るものは *Progenitor* ではなく *Nurturer* であつて、妊娠中の寡婦などが再婚した場合その生れる子供は先の夫即ち實父の子となるのでなく後の夫のものとなるといふのである。このスミスの説が誤謬であることは *Sigmund Kaub* 氏がその學位論文 *Die biblischen Familienverhältnisse in vorprophetischer Zeit, v. St.* に於て十分に究明してゐるから今これを繰返す必要がない。時代は違ふが、後世のユダヤ教徒はこの點に留意して父の血の所屬を分明にする爲めに寡婦及び離婚した婦の再婚猶豫期間を九十日と定め少くともその九十日を経過しない内は再婚を許さなかつた位である。

子は何時父權から解放されるのか。これも亦簡單なるが如く見えて困難な問題である。羅馬人は父の死によつて、古代ゲルマン人は子の家持によつて、子が父の支配から解放され。女は大體に於て結婚によつて父權から夫權の下に移されるのであつた。ヘブライ民族の場合、父の生存中は子は父の支配を免れなかつたとするのが從來の通説であるが、ラウ氏はこれに關して前記の論文の中に於て興味ある論述をなしてゐる。それによれば先づ創世記二の二四の「是故に人は其父母を離れて其妻に好合ひ二人一體となるべし」とあるのが問題になる。これを人によつては母權、または *Beoma marriage* を發端するものであると解した人もゐるが、斯様な見解は今日最早顧る余地がない。「一體」とは「一ツの肉」と譯する方が原意に忠實であるが、一ツの肉とは同族を意味する場合もあるが(二五ノ四九<sup>レ</sup>記)、この場合は矢張り夫婦の愛を言ひ現したものである。さればこの記載は妻を娶つて



父母と相離れることを意味するものであるが、若し然りとすればこれは重大な意義を含む譯であるが、しかし文句があまり簡單なのでこれのみでは斷定することは危険である。アブラムとアドニヤは父の生存中に謀叛の目的で騎馬、戰車などを購入したといふのであるから、彼等が自分の財産を有つてゐたことが分る。またアブラムは自分個人の家畜も所有してゐたやうである。しかしこれらのことは王家のことであるから、これを以て直に一般を推するといふことは困難である。この問題に關聯して、申命記第二十二章に重大な暗示を與へるものがある。

人もし妻を娶り之とともに寢て後これを嫌ひ、我この婦人を娶りしが之と寢たる時にその處女なるを見ざりしと言て、誹謗の辭柄を設けこれに惡しき名を負せざば、その女の父と母その女の處女なる證跡を取り門に在る邑の長老等に之を差出し而してその女の父長老等に言べし、我この人にわが女子を與へて妻となさしめしにその人これを嫌ひ誹謗の辭柄を設けて言ふ我なんぢの女子の處女なるを見ざりしと然るに吾女子の處女なる證跡は此にありと、斯いひてその父母かの布を邑の長老等の前に展べし。然る時は邑の長老等その人を執へてこれを鞭ち、又これに銀百シケルを罰してその女の父に償はしむべし、其はイスラエルの處女に惡しき名を負せたればなり、斯てその人は之を妻とすべし、一生これを去ことを得ず。然と、この事もし眞にしてその女の處女なる證跡あらざる時は、その女をこれが父の家の門に曳いだしその邑の人々石

をもてこれを撃ころすべし、其は彼その父の家にて淫なる事をなしてイスラエルの中に惡を爲てなひたればなり、汝かく惡事を汝らの中より除くべし。

こゝでただ注目することは、新婚したばかりの夫が一人前の獨立人として活躍してゐる點にある。女の方ではその女の父母が女子の代りに活動してゐるが、夫の方ではこれが結婚の破談といふ重大な事件であるにも拘らず問題に出るのは夫一人だけであつてその父母には少しも言及されてゐない。ヘブライ人の風俗では子女の結婚を取定めるのは普通の例にしたがへばその父母であるから、この場合に夫に父母がないと豫想したとすれば、それは變則になる譯である、これが結婚した男の獨立を證する所であるといはれる。しかし同じ申命記に於ても第二十五章のレヴィル結婚の規定に於ては結婚した男が兄弟とともに居る(ニシユブ、ヤクダ)やうに記されてゐる。これが一見前記の第二十二章の記載と矛盾するやうに見えることもないが、しかしその内面に於ては矛盾してゐない。子が結婚すれば何れも皆親と別れて獨立するとは限らない。やはり親の手下には残つて親の世帯、家事に従事するものがなくてはならない筈である。それは多くの場合、長男であつたであらう。長男は遺産相続の場合二人分の分前をもらふことになつてゐるのである。レヴィル結婚の場合、未亡人の二番目の夫となるべき候補者は亡夫と同居の兄弟といふことになつてゐるが、その同居の兄弟といふのは未だ分家してゐない即ち未婚の兄弟を指すものである(アツシリア婦女法典參照)。その反面

にはやはり結婚した子は分家するといふ考が伏在してゐるものといはねばならない。しかし婦を娶つて分家した子が果して獨立したものと云へるかどうか、それがまた問題である。分家したからとて親を全然顧みない譯にはいかぬであらう。親の生活が窮するとまた同じく親を養はねばならない。しかし一旦親を離れて分家すれば從來と違つて一々親の干渉を受けることがなく、ある程度まで獨立したものと云へるであらう。斯様な子の分家を以て新時代の傾向と認める學者があるが、吾々が今問題にしてゐる時代が舊約時代であるから、その時代的區別の考は當らない。こゝで詳論は略するが、全舊約時代を通じて子の分家といふことがあつたのである。従つて Westermann 氏がヘブライ人にかゝる記述中に there is no indication that the subjection of sons ceased after a certain age と斷じたのはあまり疏に過ぎる。斯様なことは比較研究者の通弊とする廣淺探の結果で、やむを得ないところでもあらう。また、ヘブライ民族に於ては子が父の生存中に父權を脱して完全に獨立し得るとはいへない状態である。

王位繼承の場合などに於ては複雑な事情によつて長男が引繼がないで次男が王位にあがることがあつたといふも、一般國民に於ては習慣は無言の力をもつてゐて、長男が優遇された。申命記第二十一章の遺産相續の規定を以て從來の親の勢力を抑制する爲めのもののやうに解するのは多くの困難を孕む。遺産分配の場合、長男には二人分の分前を與へるといふことは從來から長男が遺産相續の

とき優遇されてゐた慣例を數字的に明確に定めただけであつて、親が長男優遇の慣例を破るから、それを防ぐ爲めに特に斯様な法規を定めたものと考へられない。親が社會の慣例を無視して長男に與へるべき權利を勝手に他の子に與へるやうなことはあまりなかつたものと見なければならぬ。若し斯様なことがあつたとすればそれは極めて特別な例外に屬することであり、社會の疑問とするところであつた。長男相續權の欺買、ヤコブのエフライム按手などの物語はその著しい例である。要するに自分の遺産であるといふ理由で從來の慣習を無視して之を分配することは社會の許すところでなかつたのである。その他、親も子に對して幾多の義務をもつてゐる。子供をよく善導教育するのも親の任務とされてゐるのであり、子の嫁に適當な女をさがすのも親の負擔に外ならない。從來、親が子の結婚を決定するといふ理由で、これを一種の親の權利と看做す傾向があつたのであるが、その實はそれは親の負擔なのである。親が子女を犠牲に獻げるときも親の生殺與奪の權に舉げられるのが普通であるが、これも必ずしも然う簡單に斷ずべき事柄ではない。一體に子女捨殺子女犠牲の風習を全然認めない社會に於ては親が子女を以て自分の權内に屬するものといふ理由でそれを殺すことは出来ない筈である。子女犠牲の如きも父權のしからしむるところでなく、ただ問題は社會が斯様な風習を認めたか否かにある。從來「父權」「家長權」の如きをあまりに過大視して且つこれを濫用し色々の弊に陥つてゐることは斯様な點から見られる。斯くの如く、ヘブライ民族に

